

# ダファー音楽の分析的研究 —ネパール中世の音楽理論との関連から—

Joshi Sawan

東京芸術大学音楽学部 専門研究員

## 緒 言

ダファー Dāphā 音楽は、ネパール、カトマンズ盆地を中心にネワール族の男性集団 *Dāphā Khala* によって伝承されている賛歌スタイルの宗教歌謡の一つであり、中世マッラ王朝時代（13～18世紀）以来の伝承を保持している。ダファーの曲は神々や王に対する感謝を込めたサンスクリット語、古いネワール語による詩からなり、マイティリー語を使って作詩したものも含まれている。

ダファー音楽は、キーンという大型の両面太鼓、ターという打ち合わせる鐘、チャリという小型シンバルを伴奏に、歌い手が二手に分かれて神や王への感謝、祈りを交互に唄い上げていくものである。このような演奏はカトマンズ盆地の年中行事などに際して、近くの街区周辺の仏教寺院とヒンドゥー教寺院の両方で行われる。

ダファー音楽はネパール独自の、芸術的、祝祭的、宗教的な要素が混ざりあった音楽文化の一つであり、カトマンズ盆地の儀礼的コンテキストやシーンで上演される。音楽的にはインド古典音楽と共通するラーガ（旋律組成）とターラ（リズム）の理論の概念をもつ。しかし、それは現在、北インドで行われているヒンドゥスターニー音楽の形式とは異なっている。現在演奏されているヒンドゥスターニー音楽は近代において中世から変化した形式である。このような事実から、ダファー音楽とインド音楽が同じ基盤の理論と文化を持つのではないかと予想した。本研究はその予想に基づき、ダファー音楽の詳細な分析を行うことで中世ネパールの音楽理論の構成を明らかにし、ひいては南アジア各地の古典音楽史への根本的な理解につながるのではないかと考え、調査を進めた。

## 方 法

本研究では文献調査と現地調査を行った。文献調査はネパールのカトマンズ盆地にある様々なダファー音楽伝承団体が保有している歌詞集、儀礼書歌詞集、現地ネワール語で書かれたダファー音楽についての文献の中で特に

Jhigu baja Jhigu Sanskriti の第1、第2シリーズの文献を中心にを行い、その他にも The Asha Archives（アーシャー・サファー・クティ古文書館）からそれらに関する資料を入手し、分析した。

また、フィールドワークとしてパタン市を中心に、ダファー音楽集団の演奏会に赴き、研究対象の演奏を音と映像に記録し資料化する取材を行い、あわせて演奏者をはじめとする関係者からのインタビューも行った。このような資料・情報の分析の主な観点は次の3つである：①上演に関する儀礼的習慣と社会的意義、②ダファー音楽の構造と伝承にみる中世ネパール音楽の痕跡、③ダファー音楽におけるインド音楽理論との比較

## 調査結果

現在、カトマンズ盆地において、ネパール各地あるいは隣国からの移住者がますます増えており、それによって様々な文化がもたらされている。その反面、ダファー音楽のような古くから伝えられてきた貴重な文化は衰退しつつある。このような現状の中で、本調査では伝統文化のひとつであるダファー音楽の演奏の基盤となるラーガとターラの概念を詳細に分析し、その実態および数と構成を把握することを試みた。その結果、ダファー音楽はインド音楽の理論の根本につながっているという根拠をつきとめることができた。

このようなことも踏まえ、ダファー音楽は北インドの地域では失われてしまったような古い音楽形式を、いわば「化石化」して保存しているとも見られる。たとえば、ダファー音楽に使われているラーガには今日インド音楽ではあまり演奏されなくなったり、消滅してしまったりしているラーガが多く見られるのである。これは、ダファー音楽の伝承者たちがプロの音楽家として活動しているのではなく、日常的な義務と捉えて音楽を伝えており、そのために音楽にあえて独自の改変を加えてこなかったということが理由であると推測され

る。つまり、ダファー音楽はネパール中世音楽理論とインド音楽のタイム・カプセルのような存在となっているということが理解できる。



図1 パタン市のニャーツカ Nyāchuka 居住地のダファー集団

考察・成果

調査と入手した資料による分析から明らかになった内容を以下に示す。

1. 上演に関する儀礼的習慣と社会的意義

ダファー音楽の演奏を行うには様々な段取りやルールがある。その儀式は基本的に I. 導入部 II. 賛歌 III. アーラティの三つのプロセスに分けられる (表 1)。

ダファー音楽の演奏の流れを分析すると音楽的な側面からだけではなく、開始から終了まで様々な儀式を行い、その儀式の中にある様々な決まりごとや規則をお互いに尊重し合って厳しく守りながら演奏することがとても重要とされていることがうかがわれる。現地では社会的、文化的側面からも、ダファー音楽を大切にとらえているということがわかる。

2. ダファー音楽にみられる中世ネパール音楽理論の痕跡

南アジア各地には、「ラーガ」と呼ばれる旋律の概念

表 1

I 導入部	
i	演奏者がそれぞれ決められた位置に座る。
ii	芸能の神 Nāsa Dyō (シヴァー神の一つの姿) に始まりの挨拶として演奏を捧げる。
II 賛歌	
i	一番最初にグルが演奏する歌の旋律を軽く一人で歌いだす。
ii	キーン奏者がキーンを叩いてこれから歌おうとする曲のターラの合図をする。
iii	ターとチャリも加わる。
iv	歌を全体で一緒に歌い始める。
v	すべての歌詞の最初から最後まで 2, 3 回程度を繰り返して歌う。
vi	曲の終わりに、キーン奏者が終止のポールを叩く。
vii	グル一人でラーガの旋律を即興で軽く歌いだす。
viii	曲が終わったというサインとしてキーンが短く叩かれ、ターとチャリも鳴らされる。
III アーラティ	
i	神に光を与えるために歌を歌う。(アーラティとは「神聖な光」という意味である)
ii	最後にもう一度芸能の神に終了の挨拶として演奏を捧げる。

と「ターラ」と呼ばれるリズムの概念を有する演奏体系の古典・伝統音楽が広く存在する。ダファー音楽にもこのような理論の基盤があり、ネパール中世から発達しながら伝承されてきている。ダファー音楽の各集団が使用している歌詞集の写本では歌詞の上にラーガ名とターラ名が記述されている。歌詞の中には当時の王に対する感謝を表す内容も多く見られる。現在演奏されているダファー音楽のほとんどはネパール中世から現在より60年前までの間に作曲されたものである。それは、歌詞に

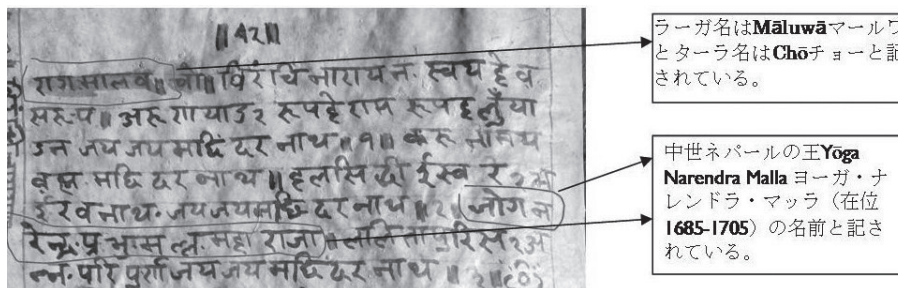


図2 ダファー音楽で歌われるデーヴァナーガリー文字で書かれたネワール語の歌詞

登場する王の名前から推察される(図2)。

ところで、ここで使われている多くのラーガは中世(12世紀～18世紀)に生まれたラーガで、現在でも古典音楽や伝統音楽に使われている。例えばラーガ・バサント Basanta は12世紀、ラーガ・イマン(ヤマン) Iman は14世紀、ラーガ・マッラル Mallar は16世紀に生まれたもので、現在ネパールはもちろんのことインド各地でも広く演奏されている。

このような文献調査から、ネパールのカトマンズ盆地で演奏されていたラーガの数は30～40種類であると推測することができたが、その中で以下の32種類のラーガが現在使われていることが明らかになった(表2)。

ラーガとは旋律の動き方の規則のことである。ラーガによってそれぞれの音階は異なる。また、季節や時期や時間によって定められているいくつかのラーガもあり、定められている時にしか演奏しないことも多い。

次にダフアー音楽のターラ(リズムの概念)について述べる。

ダフアー音楽には15種類のターラが存在するが、以下の7種類がその中でもよく使用される主なターラである。それらは i. チョ Cho (8拍子) ii. ジャティ Jati (7拍子) iii. エクター Ektāl (12拍子) iv. プラター Prātāl (14拍子) v. ガンダ (14拍子) vi. ブラフマター Bramhatāl (10拍子) vii. パレマン Palemān (6拍子) である。各ターラはボール bōl の異なる8つの段階で

構成されている。ボールとは唱歌のことである。ターラを構成する8つの段階の各段には名称がある。それらは、i. Chhātan チャータン、ii. Mātṅā マットワー、iii. Twā Lhāyegu トワーラーエグ、iv. Nhyōyā ニョーヤー、v. Gau ガウ、vi. Chalti チャルティ、vii. Lichō リチョー、viii. Kōchhīgu コーチグである。例として、7拍子のジャティのチャータンからトワーラーエグまでの段階のボールの動きを見てみよう(表3)。

ダフアー音楽には、もう一つ、グワラ Gwara という複雑なリズム・パターンが存在する。グワラとは、いくつかのターラをつないで構成したリズム周期のことである。グワラで構成されている曲の場合は上記に述べた主な7種類以外のターラも使われる。グワラは3種類のターラから最大12種類までのターラで構成される。

### 3. ダフアー音楽とインド音楽の理論の比較

i. ラーガとターラで音楽が構成されているという点では、ダフアー音楽とインド音楽との間には大きな共通点があると言える。

ii. ダフアー音楽に存在する半分以上のラーガ名は北インド音楽にも使われている。しかし、両国では同じラーガ名でも音階は全く違うことも多い。例えば、ラーガ・バサントの場合、それぞれの音階は表4のように異なっている。

バサントとはネパール・インドでは「春」という意味

表2 ダフアー音楽に使われているラーガ

	ラーガ名	演奏する時間、時期		ラーガ名	演奏する時間、時期
1	Sārang		17	Bihag	朝
2	Kola	1:00-2:00	18	Kausik	
3	Māla (Māluwā)	9:00-12:00	19	Āshāvāri	
4	Sorath		20	Kāfi	
5	Nat		21	Mālashri	10月
6	Jayashri	7:00-9:00	22	Basanta	春
7	Bibhās	12:00-13:00	23	Rāgshri	
8	Bijaya	19:00-20:00	24	Ghātu	3月～4月
9	Iman		25	Sinājyā	雨季
10	Mallār	雨季	26	Gauri	
11	Jaijaivanti		27	Vathyāri	
12	Kedār	18:00-19:00	28	Megh Mallār	雨季
13	Ballāri		29	Shyām	
14	Bhupāli		30	Sankrāv	
15	Patamanjari		31	Rāmkali	
16	Dhanāshri	11月～12月	32	Biyachuli	朝

表3 ターラ： ジャティ Jati、7拍子

i Chhatan チャータン						
1	2	3	4	5	6	7
Tini	Taghe	Nita	Khati	Tāghe	Nāti	Khatā
Dithā	Thā	Ti	Thān	—	Dhān	Ghena
Nā	—	—	Kha	Tini	Nā	—
ii Mātwā マーットワー						
1	2	3	4	5	6	7
Tāka	Rakta	Mani	Taka	Ghena	Dhān	—
Ghena	Ghena	Khati	Tini	Nā	Kha	—
iii Twā Lhāyegu トワー ラーエグ						
1	2	3	4	5	6	7
Tini	Tāti	Nitā	Khati	Tāghe	Nāti	Khatā
Dithān	Thānti	Ti	Thān	—	Dhān	Gheni
Nā	—	—	Kha	Tini	Nā	—

表4 ラーガ・バサンタの比較

	ダファー音楽	北インド古典音楽
上行形	C E F, A B c	C E F#, G# c# c
下行形	c B A G F E D C	c# B G# G F# E C# C

小文字の c, c# は1オクターブ高い音を示す。

表5 エクタルの比較

ダファー音楽												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ボール	Nakh	Rig	Na	Ghe	Ghe	Na	Rig	Na	Gheghe	Na	Na	—
北インド古典音楽												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ボール	Dhin	Dhin	Dhage	Tirakita	Tu	Na	Ka	Ta	Dhage	Tirakita	Dhin	Dha

の言葉である。音階は異なっているものの、両国ともにそれぞれの春をイメージして生まれたラーガであり、春にのみにこのラーガを演奏するという点では共通している。バサンタだけでなく、他のラーガにおいても演奏する時期や季節が定められており、ダファー音楽ではインド音楽と同じように音楽と時間が非常に深く結びついているということがうかがえる。

iii. 次に両音楽のターラを比較してみる。ダファー音楽に存在するエクタルとインド古典音楽にあるエクタルは同じ12拍子で構成されているターラだが、その枠組みとボールが全く異なる。

表5のように、ダファー音楽のエクタルは3-3-3-3のリズムパターンであるが、それに対してインド音楽の

エクタルは4-4-4のリズムパターンで構成されている。

iv. ダファー音楽には、演奏の初めにグルー一人だけでこれから演奏するラーガをリズムなしで即興的に歌うラーガ・カエグという部分がある。これはインド音楽のアラープという部分にあたる。その後、ダファー音楽では既存の曲を演奏するが、北インド古典音楽ではその後も即興演奏が行われる。南インド古典音楽ではダファー音楽と同じように既存の曲を演奏する傾向が多く、ダファー音楽はどちらかというと南インド音楽の形式に近い。

### 終わりに

ダファー音楽のことを現地の人々は shastriya sangeet (理論的に体系化された音楽という意味) という意味の言葉で深く認識している。shastriya sangeet



たとえば現在ネパールでは北インドからネパール近代1769年以降宮廷で導入されたヒンドゥスターニー音楽のこととして一般的に知られているが、ダフアー音楽もヒンドゥスターニー音楽と同じようなラーガとターラの理論に基づく音楽であるためにそのような認識をされている。ヒンドゥスターニー音楽が、北インドの宮廷でイスラーム文化の影響を受けながら発展し、ネパールのシャハ王国時代の1769年以降に導入されたのに対し、ダフアー音楽はネパールのマッラ王朝時代から儀礼の場で主に用いられ、後世まで衰退しながらも伝承されてきた音楽である。つまり、ダフアー音楽はネパールに現存する古い形のインド系音楽でもあるといえる。

ダフアー音楽は男性のみによって奏でられる。演奏者は50代から80代ぐらいの中高齢から高齢の男性が多い。場所によって若い男性も見られるが、その数はとても少ない。これまでダフアー音楽に関わっている人々の多くは、この芸能は研究対象になりえるとは思っていなかったが、ダフアー音楽の特徴と重要性を理解してこれを維持していく必要があるという声もあり、場所によっては若い人々の参加も求められている。しかしダフアー音楽の知識を持っている年輩のグルたちが毎年少しずつ死亡しているということもあり、ラーガとターラを正確に表現できる演奏者たちが減ってきている。そのため、現在ラーガ本来の形が失われつつある。本調査を踏まえて、これからこのように失われつつあるラーガを明確に浮き彫りにしていき、保持していくことを今後の課題としたい。

## 概 約

ネパールの音楽に対する理論的・歴史的研究は総じて乏しい。しかも、ネパールの人口の大半を占め、カトマ

ンズ盆地をはじめとする都市や農村に居住する民族（パルバテ・ヒンドゥー、ネワール）の音楽については、ヒマラヤ山脈地帯に住むチベット系民族よりも、むしろ研究が立ち遅れている状況にあり、特に歴史的研究はほとんど未開拓である。筆者は今回の調査において、歴史的資料、現存する音楽家へのインタビュー、現行の伝承内容の三者を照らし合わせることによって、ダフアー音楽の中に残されている南アジアの古い音楽形式の痕跡をたどることができた。今回の現地調査によって現在のダフアー音楽の実態を明らかにし、さらに歴史的資料との比較を通じて、ダフアー音楽の中に中世の南アジアの音楽形式が残されているのではないかという説に対する評価を与えることがこの研究の目指すところである。

## 謝 辞

本研究の遂行にあたり、平成24年度学術研究奨励金の御支援を賜りました公益財団法人三島海雲記念財団に篤く御礼を申し上げます。

## 参考文献

- 1) Widdess, Richard: *Time Space and Music in the Kathmandu Valley*, IAS Newsletter, pp.24, 2003
- 2) Grandin, Ingemar: *Raga Basanta and spring songs of Kathmandu Valley*, European Bulletin of Himalayan Research, pp.57-80, 1997
- 3) Toffin, Gerard: *Newar Society- City, Village & Periphery*, Himal Books, pp.75-119, 2007
- 4) Shrivastav, Harischandra: *Raga Parichaya 3*, Sangeet Sadan Alahabad, pp.90-180, 1997
- 5) 田中多佳子: 「ヒンドゥー教徒の集団歌謡—神と人との連鎖構造」、pp.21-272 世界思想社、2008.